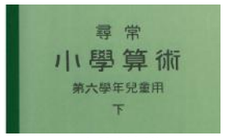
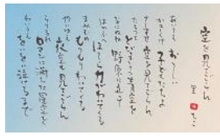
- Contents -



１ 活活算数
伝説の算数教科書



２ 活活寄席
活活寄席

３ 活塾草紙
まわりねこ

活活こども寄席

算数教室３名、落語教室１名、両教室１名。落語教室の稽古は公開を始めました。東奥谷教室のご近所の皆さんが来られて、楽しい一時をすごしています。

塾長の活活（いきいき）算数　第３回

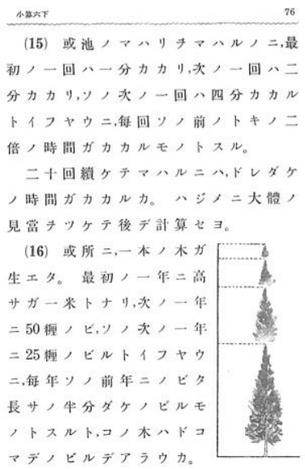
伝説の算数教科書②

伝説の教科書「緑表紙」、その伝説たるゆえんその二のお話です。

小一上巻の全ての頁が美しい絵で構成されている緑表紙本ですが、文字がないということは、幼児期との接続に配慮せよという、今のスタートカリキュラム的な意味を持っているのでしょうか。もちろん塩野先生の視野には入っていたと思いますが、私は、もっと高い次元を感じました。「空高くへと子どもたちを導いて算数の世界を俯瞰サセナサイ、小一上巻はその滑走路として取り扱ヒナサイ。」いったような。

では、緑表紙がどれだけの高みまで導いていくのか見てみましょう。

問題「あるところに一本の木が生えた。最初の一年に高さが一メートルとなり、次の一年に五十センチのび、その次の一年に二十五センチのびるというように、毎年その前年に伸びた長さの半分だけ伸びるものとすると、この木はどこまで伸びるであろうか。」



小算六下　76

(15) 或池ノマハリチマハルノニ,最初ノ一回ハ一分カカリ,次ノ一回ハ二分カカリ,ソノ次ノ一回ハ四分カカルトイフヤウニ,毎回ソノ前ノトキノ二倍ノ時間ガカカルモノトスル。

二十回續ケテマハルニハ,ドレダケノ時間ガカカルカ。ハジメニ大體ノ見當チツケテ後デ計算セヨ。

(16) 或所ニ,一本ノ木ガ生エタ。最初ノ一年ニ高サガ一米トナリ,次ノ一年ニ50糎ノビ,ソノ次ノ一年ニ25糎ノビルトイフヤウニ,毎年ソノ前年ニノビタ長サノ半分ダケノビルモノトスルト,コノ木ハドコマデノビルデアラウカ。

これは、小六下巻の巻末問題です。どうです？すごいでしょ。小学生で極限をとりあつかっています。しかも、有限です。二メートルに収束する場面の問題です。当時の子どもたちは、いったい何年まで調べていったのでしょうか。

この詳細については、今月十一月の活活寄席で展示とお話で解説します。

今の子がこの問題に出会ったならばどうでしょう。知ったかぶりで「無限」と言って、試しや調べをおっくうがる子どもならば、塩野先生の数理思想には到底たどり着けません。

私たち松江算数活塾は、できれば十年、少なくとも七年目までを調べてみてから考えるような子どもを育て、塩野先生の期待にこたえたいと思います。

（塾長　川上宜久）

れのお国言葉で強い名前の提案をさせたのです。「そら強いいうたらトラやろ、なんちゅうたかて、タイガースは日本一やさかいな」と大阪のおじさんに言わせたかと思うと、「リュウだぎゃー」と名古屋のおばさんに反論させるという具合です。

この話を高尾小「にこにこ寄席」で最初に演じたのは、三年生の女子児童でした。当時は、三年生と四年生の複式学級の子どもたちだけで落語活動をしていました。始めたばっかりの彼女にとって、話を覚えることはかなり荷が重かったようです。苦手意識もあったかもしれません。勧めた話をなかなか覚えようとせず、一度叱ったことがあります。どちらかといえばいつもニコニコ朗らかにしている彼女がその時ばかりはしゃくり上げて泣き、「怒らなくてもいいじゃないですか」と抗議しました。「自分だってがんばっているのに先生は分かってくれない」そんな悔しい思いを懸命にこらえていることにようやく気がつきましたが後の祭りでした。その後どう慰めたか、または何も言えなかったのかよく覚えていませんが、気分一新をはかる意味で与えたのが「まわりねこ」でした。なぞなぞの繰り返しですから覚えやすくもあったのでしょう。表情もすっかり以前のにこやかさを取り戻しました。ただ方言には手こずりました。大阪、名古屋、福岡、北海道、高知それぞれの独特な言葉やイントネーションは、そう簡単に表現できません。そこで私は、クライマックス部分を「出雲のおばば」に代え、出雲弁にしてみました。モデルは、母や祖母です。

「はあ？、ネコの名前に壁だことのだらつけな（ばかばかしい）。なんぼがんじょ（頑丈）な壁だけんて、ネズン（ネズミ）が出てきて噛んさがったら（噛みでもしたら）、ひとたまあ（ひとたまり）もないがの（ないじゃないか）…（まだまだ続く）」

彼女もこれには面白がって、ついにできあがり。これはどの会場でも想像以上にドッカンドッカン受けて、彼女の代表作になりました。今も後輩たちが受け継いでいます。

この「まわりねこ」は想像以上の効果をもたらしました。彼女はすっかり自信を付けて、その後は、「反魂香」や「牛ほめ」など、言い立て（一連の決まった長台詞）が妙味の落語ネタを得意とするようになるのです。

「どうやって覚えてるの」と感心して聞いてみましたが、「えへっ」と笑うばかりで教えてくれませんでした。

（宮森健次）

〒690-0871松江市東奥谷町386-7　☎0852-67-8005　0852-67-8015　https://katsujuku.net　info@katsujuku.net

第４回

活活寄席

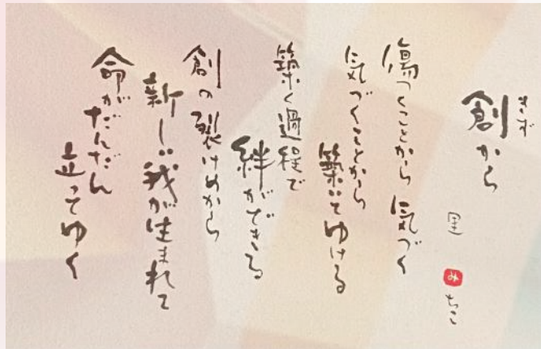
里みちこ詩展ーいのちの四季ー

十一月十八日から二十日

鹿島のギャラリーあいえんきえん

里みちこさんと出会ったのは、もう二十年以上も前です。知人の新聞記者から「大阪にこんなおもしろい詩人がいるから」と隠岐で引き合わせてもらい、その後奥出雲に招いて以来のお付き合いです。

里さんは、ときどき私に尋ねます。



「ねえ、私って詩人かしら…」

里さんからすれば、ただ言葉から思いついたあれこれを綴っているだけなのに、と言いたいのでしょう。

詩人の定義はどうあれ、里さんのことばに、自身の記憶や感情を揺さぶられる人がいることは事実です。行間に誘う詩人、私はそう名付けたい気がします。

里さんの詩を通して、あなた自身の大切なだれかとの記憶が蘇るかもしれません。（宮森健次）

活活こども寄席

もうすぐ一番太鼓

落語教室に二名の塾生が入り、いよいよ「活活こども寄席」が始動します。高座名も決まりました。

活塾亭ふらめん子

活塾亭あーと

と申します。どうぞよろしくお願いいたします。次号では、写真付きでご紹介する予定です。稽古はまだ数回と少ないですが、すでに小咄のレパートリーもできました。あとはどんどんお客様の前に立って実践あるのみ。子どもたちをいちばん育ててくださるのはお客様です。

今月の終わりに市内デイサービスにて初舞台を踏みます。公演依頼も鋭意受付中です。

活塾草紙　その肆

まわりねこ

これも高座で聞いたことがありません。なぞなぞをつないだような、よく言えばかわいらしい、悪く言えば単純極まりない話なので、今の落語家が取り上げる気にならないのもわかる気がします。

ネコが生まれたので名前を付けようとします。どうせなら強い名前にしようと相談すると、「強いといったらトラだ」。そこから無限ループのなぞなぞ開始です。「トラより強いのは？」

「リュウ」、「リュウより強いのは？」、「風」、「風より強いのは？」…

調べてみると、その昔高座にかかっていたときは、弁慶とか義経などが登場しています。落語が隆盛を誇った明治大正期で強いものの代名詞と言えばその二人になるのでしょうね。もちろん、今の子どもたちにその二人の名前を言ってもピンときません。小佐田定雄さんは『5分で落語の読み聞かせ』で楽しい工夫をしています。相談相手を日本各地の親戚にして、それぞ

（裏面に続く）